

## 『明暗』における漱石創作意識の現場

——「吉川夫人と津田の対話場面」と漢詩——

田 中 邦 夫

### はじめに

津田の病室ではさまざまな登場人物が訪れ、彼らは津田との対話を通して醜悪な内面を見せる。小林が津田から金を強請ったあと、吉川夫人もまた、百三十一章から百四十三章にかけて登場する。

この一連の場面で、吉川夫人は津田に、お延を再教育する必要がある、その方法は任せると、その横暴な性格を現す。そして逡巡する津田に対して、夫人は、突然清子を話題にし、その未練を晴らして来いと迫り、清子がいる温泉場に行く決心を津田に強いる。

この一連の場面は、『明暗』の後半部における津田の温泉行きへとつながる重要な意味を持っている。しかし作者漱石は、津田の意識に映る吉川夫人の横暴さは描くものの、語り手の視点からする吉川夫人像についての分析や批評を書き込むことはせず、その言動をあるがままに淡々と描き出してい

るのみである。したがって、『明暗』のこれらの場面からは作者漱石の創作意識を読み取ることはできない。

ところで漱石は、これらの各章を執筆した日の午後、七言律詩を創作し続けているが、この一連の漢詩には当然のことながら、午前中に執筆した『明暗』の創作意識と深い結びつきがあると推測される。私見によれば、これら一連の『明暗』各章と、その各章を執筆した日の午後に創作した漢詩とのつながりを解明することによって、その『明暗』各章を書いたときの作者漱石の創作意識の現場を明らかにすることが出来ると考えられる。結論を先に記せば、それらの漢詩には、『明暗』には書き込むことのなかった作者漱石の登場人物への思い——津田における清子の意味や彼が清子に会いに行くことの意味、吉川夫人の言動に対するコメントや批判などが表明されていると考えられるのである。

そこで本稿では、吉川夫人と津田の対話場面の最初の章（百三十一章）と、そのクライマックスを形成する章（百三

十七章から百四十三章)を取り上げ、その章を書いた日の午後の漢詩とのつながりのなかに読み取ることの出来る作者漱石の創作意識——①『明暗』(吉川夫人と津田の対話場面)に対する漱石の基本的立場②津田にとつての清子の意味③吉川夫人に対する作者漱石の批判——を考えてみたい。<sup>(1)</sup>

## I

まず、『明暗』(吉川夫人と津田の対話場面)の描写についての作家漱石の基本的態度を、これらの場面が始まる百三十一章とその日の午後に創作した漢詩との関係を通して考えていこう。

百三十一章梗概——吉川夫人が津田の病室に顔を出したのは、小林が病室を出て十分後であった。夫人は津田への見舞いに持参した楓の盆栽(植木鉢)を看護婦に床の間に置かせてから席に着いた。津田は夫人がいつもとは違う「気分」を持って入ってきたことに気づき、「嘘」を並べて夫人の反応を探った。津田は、夫人の微笑に自分への「同情」を認めた。しかし夫人の来訪の目的は、彼の思惑とは違っていた。——

漱石は『明暗』百三十一章を書いた九月二十五日の午後、次の漢詩を創作している。

孤臥独行無友朋 孤臥独行 友朋無く  
又看雲樹影層層 又た看る 雲樹 影層層  
白浮薄暮三叉水 白は薄暮に浮かぶ 三叉の水  
青破重陰一点燈 青は重陰を破る 一点の燈

入定誰聴風外磬 定に入りて 誰か聴く 風外の磬  
作詩時訪月前僧 詩を作りて 時に訪う 月前の僧  
閑居近寺多幽意 閑居 寺に近くして 幽意多く  
礼仏只言最上乘 仏に礼して 只だ言う 最上乘と  
大意——

(首聯) わたしの悟りへの道は独り行くしかない。わたしは高い木立の茂みを見つめる。この木立の孤高の姿こそ私の生き方なのだ。

(頷聯) わたしの心に浮かぶ風景——それは、薄暮に白く浮き上がる三叉の川であり、深い暗闇を照らす青い灯火(法灯)である。(それは真実世界のすがたなのだ。)

(頸聯) 禪定に入っているわたしには、『風外の磬』(「俗人に聞こえない真実世界の磬の一打」が聞こえ、詩作をすれば、『月前の僧』を尋ねることが出来る。(「禪詩の中では真実世界に生きている知音を得ることが出来るのだ」)。

(尾聯) 私の閑居は寺に近いので(「わたしのは心は真実世界へ」悟りの世界へ)繋がっているのだ、仏法と人の深い関係に思いをめぐらしたり、悟りの境地に触れることが出来る(「幽意多し」)。わたしはその仏恩に対して、仏に礼拝し、(言葉では、そのありがたさを表現出来ないから)ただ、「最上乘」と言うのみである。

ここに詠われている意識世界は、作者漱石の心象風景であり、それは禪的意識の形象化である。漱石が『明暗』百三十一章を書いた日の午後、漢詩においてこのような禪的意識を

形象化した理由は何であつたろうか。

漱石が、右の漢詩（「孤臥……」）を構想した理由を考える上で注目すべきは、この漢詩で使用されている詩語と、『明暗』百三十一章の最初に描きこまれた吉川夫人の持参した「楓の盆栽」の描写表現との重なりであろう。

結論を先に記せば、この重なりには『明暗』百三十一章以下の一連の場面を描こうとする漱石の作家意識が表明されていると考えられる。

まず、両者の重なりから見ていこう。

『明暗』百三十一章で吉川夫人が楓の盆栽を持ってきた場面を引いておこう。

彼は夫人の姿を見るや否や、すぐ床の上に起き返らうとした。夫人は立ちながら、それを止めた。さうして彼女を案内した看護婦の両手に、抱へるやうにして持たせた植木鉢を一寸振り返つて見て、「何処へ置きませう」と相談するやうに訊いた。津田は看護婦の白い胸に映る紅葉の色を美しく眺めた。小さい鉢の中で、窮屈さうに三本の幹が調子を揃へて並んでゐる下に、恰好の好い手頃な石さえあしらつた其盆栽が床の間に置かれた後で、夫人は始めて席に着いた。

漢詩を構成する詩語と、『明暗』のこの場面を構成する語とは、次のような重なりがある。

（上は漢詩の語、下は『明暗』の語）

「雲樹」と、「盆栽」の「楓」。（大きさは正反對だが、とも

に「木」という点でつながる。）

「白は薄暮に浮かぶ」の「白」と、「看護婦の白い胸」の「白」。

「三叉の水」の「三」と、「（楓の）三本の幹」の「三」。

「風外の磬（石の打楽器）」と、「（楓の盆栽にある）恰好の好い手頃な石」の「石」。

「孤臥」と、「（津田が寝ている）床の上」。

このような、両者における語の重なりは偶然であろうか。

私見によれば、この語の重なりは、『明暗』に描き込まれた楓の盆栽が、この漢詩で詠っている禅的世界のシンボルであることを示している。換言すれば、漱石がこの詩を創作するに当たっては、午前中に『明暗』のなかに書き入れたその楓の盆栽のシンボリックイメージが（漱石の無意識の領域で）強く作用していると考えられる。

それでは『明暗』百三十一章の最初に書き込まれた楓の盆栽のイメージは、『明暗』においていかなるシンボリック意味を持っていたのだろうか。留意すべきは百三十一章の「楓の盆栽」と津田の病室から見える「西洋洗濯屋の風景」との繋がりである。津田が入院した二階の病室からは、「西洋洗濯屋の風景」が眺められた（四十章）。そこには、青空の下で、白い洗濯物が風に揺られており、その隣には、赤レンガ造りの倉があつた（百十六章）。作者漱石は、この「西洋洗濯屋の風景」を、津田とお延の会話の場面（四十四章）、お秀と津田の会話の終わり（百十四章）、小林と津田との会話のは

じめ(百十六章)に、意識的に書き入れている。病室を訪れる登場人物たちはこの「西洋洗濯屋の風景」の意味を理解できない。しかし、その風景として存在する自然物(風・白い洗濯物・赤い倉庫・晴れ渡った青空など)は、禅的世界の(仏心の顕現である)「自然」と繋がっており、津田の病室での出来事を黙照している存在であった。(拙稿『明暗』における「自然物」と「西洋洗濯屋の風景」<sup>1)</sup>。そして、これらの「西洋洗濯屋の風景」における配色(「洗濯物の」白・「晴れ渡った空の」青・「赤レンガの倉庫」の赤)などもまた、漱石詩を構成する配色とつながっていた。これらの特色は、病室の外にある「西洋洗濯屋の風景」が、漱石詩の詠う禅的世界に内在する視線のシンボリック的存在であることをしめしていたのである。

ここで、禅的世界と漱石詩に描かれた具体的事物(形象)や色とのつながりについてふれておこう。禅的な考え方によれば、世界の根源にある「無」(「仏心」虚明)は、この世界に質料を超えて普遍的に遍満している。たとえば、達磨大師の死後も、達磨は、地上に吹く清風として存在しており、草木や石として存在しているということになる。それは、自然物(草木・石・水)のなかだけでなく、空の紺碧、薄暮の白、としても遍満している。当該詩の「影層々」たる「雲樹」や、薄暮に浮かぶ白い水、闇の中にもとる青燈などが構成する情景は、仏心の現われとしての意味合いがある。このことに留意するならば、『明暗』百三十一章に描きこんだ、吉川

夫人が見舞いに持ってきた楓の盆栽と、この日の午後創作した当該詩の景物や数・色などの一致(「樹」「白」「三」「石」など)は、『明暗』における楓の盆栽が、「西洋洗濯屋の風景」と同様に、吉川夫人と津田の会話を黙照している禅的な自然物(「仏心」)を象徴していることが理解される。

このことを考えるならば、九月二十五日の詩と『明暗』に描きこまれた盆栽とのつながりのなかに、作者漱石の『明暗』を描く視点——津田と吉川夫人の醜惡な会話を描く態度(視線)——の存在を認めることが出来る。すなわちこの詩には、これから始まる吉川夫人と津田との醜惡な世界を批判的言辭を加えることなく描きつくすのだとする、作者漱石の創作態度——禅的思惟の立場——が表明されていると考えられるのである。

## II

### 1

次に、『明暗』における吉川夫人と津田の対話のうち、百三十七・百三十九・百四十の各章と、その各章を執筆した日の午後の漢詩との関係を取り上げ、その関係から浮かび上がる津田にとっての清子の意味を考えていこう。

十月一日に執筆した『明暗』百三十七章とその午後に創作した漢詩との繋がりがからみていこう。

百三十七章梗概——吉川夫人は、自分は津田の同情者であり、あなたにしてあげることがひとつある、わたしの言うことを

聞きますかと、津田にこれから話す計画の実行を迫った。しかしどんな注文が夫人の口から出るか見当のつかない津田はひそかに恐れた。夫人のことばに逆らうことの許されない津田は、「蘇生の活手段を奪はれた仮死の形骸」とおなじであり、「生還の望」みのしかとしない危地に入り込む勇氣を持たなかった。逡巡する津田の様子を見た夫人は、自分の話は「笑談見たいなもの」で、「面白半分の悪戯」に過ぎない、だから思い切つてやるとおっしゃいとその実行を再度迫った。津田は、そのことばに唆されて遂に実行を口にした。すると夫人は、その計画の「悪戯」の性質を説明せず、突然清子を話題にして津田を驚かせ、ついでお延が清子のことを知っているかどうかを話題にした。

『明暗』百三十七章は、吉川夫人が始めて清子の名を口にする場面であり、『明暗』の後半（温泉場における津田と清子の対面）につながるきわめて重要な場面である。しかし漱石は、この場面でも淡々と吉川夫人と津田との対話があるがままに描き出すのみである。

漱石は、この章を執筆した日の午後、次の漢詩を創作している。

誰道蓬萊隔万濤 誰か道う 蓬萊 万濤を隔つと  
于今仙境在春醪 今に于て 仙境は春醪に在り  
風吹鞞鞬虜塵尽 風は鞞鞬を吹きて 虜塵尽き  
雨洗滄溟天日高 雨は滄溟を洗いて 天日高し  
大岳無雲輝積雪 大岳雲無くして 積雪に輝き

碧空有影映紅桃 碧空影有りて 紅桃に映ず  
擬將好諠消佳節 好諠を將て 佳節を消さんと擬し  
直下長竿釣巨鼈 直ちに長竿を下して 巨鼈を釣る  
大意――

（首聯） 誰が言うのであろうか。蓬萊山は海のかなたにあり、容易には行くことができないと。現在の仙境（人間の理想郷）は、春の濁り酒の中に存在するのだ。

（領聯） （蓬萊山は渤海の中にあるというが、その渤海国の名がある）鞞鞬は古来戦塵絶えることのない場所だが、風が吹けば、その戦塵は吹き飛ばされ、雨が大海原に降り注ぎその戦塵を洗い流せば、今まで見えなかった大自然がくつきりとその姿を見せる。（＝眞実世界から清風が吹けば「虜塵」）（＝俗世のしがらみ）は吹き飛ばされ、眞実世界の雨が大海原を洗えば、今まで気がつかなかった眞実世界の存在が顕現する。）

（頸聯） 戦塵（俗世）が消えた後に現われた世界——そこでは雲のない大岳の積雪が日の光を浴びて輝き、青空には光が満ち、その光は地上の紅桃（自然）に注いでいる。（＝俗世の中にもこそ眞実世界は厳然と存在しているのだ。）

（尾聯） 諧諷のことばをもって表現するならば、この良き日を過ごそうとして、わたしは釣竿をたれて、（蓬萊山を頭で支えているという）巨鼈を釣り上げようとしているのだ。（＝俗世とのかかわりを絶つて、自分の内部にある「本来の面目」へ＝眞実世界＝仏心＝を見定めようとしているのだ。）

『明暗』百三十七章とその日に創作した漢詩との関係を考えていこう。

留意すべきは、詩の尾聯にある語「好諶」と、百三十七章の吉川夫人のことは「笑談見たいなもの」「面白半分の悪戯」との繋がり、および禅語「巨鼈を釣る」と、百三十七章の津田の「蘇生の活手段を奪はれた仮死の形骸」や「生還の望」との関係である。私見によれば、詩句「好諶」と吉川夫人の言葉「笑談」「面白半分の悪戯」という表現の類似は、午前中に執筆した『明暗』百三十七章の内容がこの午後の詩に投影していることを示しているのである。そしてその端的な投影が、「巨鼈を釣る」という禅語と、津田の「蘇生の活手段を奪はれた仮死の形骸」や「生還の望」という表現の関係に現われていると考えられる。そこで以下、漢詩の「巨鼈を釣る」という表現と、『明暗』百三十七章とのつながりを考えていこう。

まず「巨鼈を釣る」の意味をみておく。この禅語には二通りの理解が考えられる。ひとつは、『碧巖録』など禅書で多く使われる「才能ある人物を得て、立派な雲水に仕上げる。」という意味である。この意味での使い方は、『明暗』百三十九章で、吉川夫人が、津田を「折角私が丹精して拵こしらへて来て上げたのに」と述べているように、吉川夫人が津田を自分の好みの人間（ずうずうしい人間）に仕上げているということと関係する。重要なのは、もう一つの意味——飯田氏の語釈

に見える意味——である。以下、飯田氏の語釈を引いておく。

『真歇和尚拈古』巻下「巨鼈は江湖の裡に在らず、笑うに堪えたり時の人釣竿を把とることを」つまり仙郷や巨鼈は他にあるのではない、己れの中にあるのであるとのこと。『祖英集』巻上「日暮 東澗あづみに遊ぶ」「目を極めて晩照を生ずれば、蓬萊は仙境に匪あらず、十二の鼈を釣り得、重ねて来たり孤影に謝す」

すなわち、禅語「巨鼈を釣る」で重要なのは、自分の内部にある「仏心」（＝本来の面目）を自覚する（悟る）という意味である。この詩では、この禅語を後者の意味——自分の内に存在している仏心に目を向けるという意味——で使っている。

以上のことに留意するならば、『明暗』で吉川夫人が初めて清子の名を口にした百三十七章を執筆した日の午後の漢詩で「巨鼈を釣る」と詠っていることには、『明暗』における津田にとつての清子の意味や、津田が清子と会うことの意味が象徴的に表明されていると考えられる。

漱石は、百三十七章の津田が、吉川夫人のことに逆らえない「仮死の形骸」であり、「蘇生の活手段」をもたない存在であることを強調している。この表現には、津田は吉川夫人に教育されてエゴイストとなつてはいるが、しかし津田は本来の自分（＝人間としての感情）をその内側に奥深くしまひ込んでいるに過ぎないことを示している。

このことを理解するならば、その日の午後の漢詩の尾聯に

において「直ちに長竿を下して 巨鼈を釣る」と詠っていることには、漱石自身の津田に対する根源的な認識——津田にとっての清子の意味が、津田のうちに存在する人間的生を意味し、津田が清子と会うことによって本来の自分を取り戻せば、津田は現在の「仮死」の状態から脱して、人間として「蘇生」する可能性があること——が表明されているといえるのである。

## 2

次に『明暗』百三十九章とその日の午後創作した漢詩の関係をとり上げていこう。

百三十八章で吉川夫人は津田に対して、あなたに清子への未練があるのは「事実」だと断定したあと、夫人は百三十九章で、津田の「未練」を他人に説明できると誇った。夫人によれば、津田は、清子への未練を持ちながら、それを「隠してゐる」ことになるのであった。夫人の真意を理解できない津田が説明を促すと、夫人は反対に次のように質問した。なぜ清子はあなたと結婚しなかったのかと。津田は「何故だかわからない、ただ不思議なんです。いくら考えても何にも出てこないんです……あつとって後ろを向いたら、もう結婚していたんです。」としか応えることが出来なかった。夫人は次のように言つて、津田の「未練」を煽り立てる。清子が平気だったから、あなたがあつと言わされたのではないか。その時のあつの始末はどう付ける気か。貴方が今でもそのことを考えているのは、「それが貴方の未練ぢやありませんか」

と。

右の百三十九章を執筆した十月三日、漱石は次の漢詩を創作している。

|         |                   |
|---------|-------------------|
| 逐蝶尋花忽失蹤 | 蝶を逐い花を尋ねて 忽ち蹤を失ひ  |
| 晚帰林下幾人逢 | 晩に林下に帰つて 幾人にか逢う   |
| 朱評古聖空靈句 | 朱は評す 古聖空靈の句       |
| 青隔時流偃蹇松 | 青は時流を隔つ 偃蹇の松      |
| 機外蕭風吹落寞 | 機外の蕭風 落寞を吹き       |
| 静中凝露向芙蓉 | 静中の凝露 芙蓉に向かう      |
| 山高日短秋将尽 | 山高く日短くして 秋将に尽きんとし |
| 復擁寒衾独入冬 | 復た寒衾を擁して 独り冬に入る   |

大意<sup>(4)</sup>——

(首聯) (遊山して)「蝶」「花」に出会えば(現実世界の輝く要素に心を奪われて)、ふと道(の厳しさ)を忘れることもある。(わたしの本分は、道の修行であり、その生活に勤しんでいるが、しかし)晩に林下(＝道場)に帰つても、知音に逢うことはない。(なぜなら悟りへの道は独りで行くしかないからだ。)

(頷聯) 古聖空靈の句を評する朱墨や、時間を超越して存在する偃蹇の松の青色のみが、わたしの知音なのだ。

(頸聯) わたしの心象風景——真実世界から吹く蕭風は、わたしのいる「落寞」(＝空虚)の世界の隅々までいきわたる。その蕭風が吹く「静」のなかで、露はハスの花に結ばうとしてゐる。(常識では考えられないこの風景が真実世界な

のだ。

(尾聯) 山深く、日の短いこの山寺の秋(Ⅱ人生)は終わろうとしている。私はまた寒さの染み込ませんべい布団一枚だけで、(知友もなく)独り平然と冬を迎えるのである。(わたしは、長沙和尚の境地——真実世界の輝きと厳しさを同一のものとして感得する境地に生きているのだ。)

【当該詩は、『碧巖録』第三十六則(長沙逐落花回)の次に引く『本則』を踏まえて作られている。——ある日、長沙和尚は山中を歩いて門まで帰ってきた。そこで首座が問う。「いずれへ行ってきたか」と。長沙は「遊山し来る」と答えた。さらに首座が問う。「どこまでいらしたか」と。「沙云く、始めは芳草に随って去り、又た落花を逐うて回る。座云く、大いに春意に似たり。沙云く、也た秋露の芙蓉に滴るに勝れり。」(この典拠の問題については、省略)。

『明暗』百三十九章と漢詩の関係を考えていこう。

『明暗』百三十九章の焦点は、津田の意識に上る清子の不可解な行動である。津田と結婚するはずの清子は、突然関と結婚してしまった。津田にとって、清子の行動は、「不思議」でしかなく、その理由は「いくら考へても何にも出て来ない」ものであった。留意すべきは、この章を書いた午後の漢詩の首聯(蝶を逐い花を尋ねて忽ち蹤を失い)が、この章の清子を失った津田の意識と類似していることである。もちろんこの首聯の内容は、「大意」に記したように、禪的な意識との結びつきで詠われたものであり、詩に即した意味内容から

すれば、無関係である。しかし、この首聯の表現は、百三十九章の津田の意識に同化していた漱石の意識が呼び出したものであり、この点で、この首聯の表現は、百三十九章の津田の意識と結びついていると考えられる。さらに注意すべきことは、この漢詩の頸聯で、禪的な悟りの境地が、人知では理解できない風景——蕭風が吹く「静」のなかで、芙蓉に露が結ぶ景——として詠われていることである。この真実世界(悟り)の形象と百三十九章の清子の行動の理解不能性とは一致している。この一致は、私見によれば、この詩の頸聯で詠われている真実世界(悟り)の形象に、清子の境地(禪的な悟りの意識世界)が重ねられていることを示しているのである。(なお、付け加えれば、「あつ」という間に津田から離れて、関と結婚したという清子の行動は、『無門関』三十二の「階梯に涉らず、懸崖に手を撒す」(Ⅱ次第に禪の境地を深めるのではなく、突然仏位に入ること(大死一番)の形象化である。)

漱石は漢詩の中で、『明暗』百三十九章で津田が理解不能とする清子の行動が、禪的な悟りの境地と結びついていることを示しているのである。

### 3

次に漱石が、津田と吉川夫人の対話場面のクライマックスである百四十・百四十一章と、百四十章を執筆した日の午後に創作している漢詩とのつながりを考えていこう。(なお百四十一章を書いた日の午後は漢詩を創作していない。)

百四十章の冒頭は次のように書き出されている。「準備は略出来上つた。要点はそろ／＼津田の前に展開されなければならなかつた。夫人は機を見て次第に其所へ入つて行つた。」ここで言う「準備」とは百三十八章から百三十九章にかけて、吉川夫人が津田に清子への思いを「未練」として自覚させることであつた。百四十章ではその「要点」が展開されることになる。

『明暗』百四十章梗概——吉川夫人は津田に次のように言う。へ男らしく未練を晴らしたらどうか、その方法は清子に会つて聞くだけではないか。清子は今さる温泉場で流産の体を回復するのが目的で静養している。あなたもそこに行つて、「男らしく未練の片を付けて来るんです。」夫人は旅費さえ出してやるというて津田を促した。——吉川夫人の話の「要点」は、清子に会つて未練を晴らせということであつた。

『明暗』百四十一章梗概——津田の心理においては、その実行を引き止める力があつた。「彼を引き留める心理作用の性質は一目瞭然であつた。けれども彼は其働きの顕著な力に気が付いてゐる丈で、其意味を返照する<sup>いしな</sup>違がなかつた。」と漱石は描いている。その力こそは、津田のうちにある人間としての感情であつた。この描写には、津田のうちに存在する彼の人間的な要素（『本来の面目』『仏心』）を見ている語り手の視線がある。）逡巡する津田の様子を見た夫人は次のように言つて、津田のうちにある人間としての自然な感情に蓋をさせる。へ内心行きたがつてゐるくせに、もじもじして

いる。それがあなたの一番悪いところだ。あなたは臆病なのだ。そんな見識はただの見栄ではないか。あなたはずうずうしいたちではないか。そのずうずうしさを發揮しなさい。そのためにわたしが骨を折つてこしらえてきたんだから。この夫人のことばを聞いて、津田はようやく行くことに覚悟を決めた。——

右にみたように、吉川夫人の「準備」とは、津田に清子への思いを「未練」として自覚させることであり、夫人の話の「要点」は、津田が清子に会つて未練を晴らすこと、そのために津田が清子のいる温泉場に行くことであつた。夫人はそれを津田の自発的行為として強制したのである。（しかし留意すべきは、津田の清子への意識を「未練」ということは出来ないことである。そのことを作者漱石は、『明暗』後半の温泉場における津田と清子の対話を通して示している。）

漱石は、百四十章を執筆した十月四日の午後、次の漢詩を創作している。

|         |        |             |
|---------|--------|-------------|
| 百年功過有吾知 | 百年の功過  | 吾れの知る有り     |
| 百殺百愁亡了期 | 百殺百愁   | 了期亡し        |
| 作意西風吹短髮 | 意を作して  | 西風短髪を吹き     |
| 無端北斗落長眉 | 端無くも北斗 | 長眉に落つ       |
| 室中仰毒真人死 | 室中     | 毒を仰いで真人死し   |
| 門外追仇賊子飢 | 門外     | 仇を追いて賊子飢う   |
| 誰道閑庭秋索寞 | 誰か道う   | 閑庭 秋索寞なりと   |
| 忙看黃葉自離枝 | 忙しく看る  | 黃葉自ずから枝を離るる |

大意――<sup>(6)</sup>

を

(首聯) わたしは一生を真実世界に生きる修行にささげて来た。わたしは修行における功と過(修行での努力や落ち度)さまざまな心の状態を嘗め尽くし、悟りの困難さを知っている。悟りの道は到達したようでも先があり、終わりのないものだ。

(頷聯) 西風は、眼前の風景こそが真実世界の顕現なのだと、老いたわたしに教えてくれる。突然、天の中心で泰然と煌めいている北斗星がわたしの眼の中に入り込んだ。(「わたしは突然悟りを得た。わたしは天と融合し、その立場からすべてを見ることが出来るようになった。」)

(頸聯) (悟りの境地――)、浄室での坐禅は「毒」(煩惱)を払うことにあるが、「真人」(「本来の面目」に生きる人)はその毒(「煩惱」)を飲み込んで(「毒を持って毒を攻む」)ことによって、その毒(煩惱)から脱し、(すなわち、大死して真実世界に生き返って)本当の自由(禪的な絶対の世界)に生きるのだ。また人は、俗界での「仇」(執着心)を断ち切ることによって、「本来の面目」(悟り・自然)に帰ることができるが、「真人」は「仇」(俗世との繋がり)を「追う」(「世俗の中で積極的に生きる」)存在であるにもかかわらず、その心には「執着心」がないので、「賊」(「煩惱」)は「真人」に取り付くことが出来ず死んでしまうのだ。

(尾聯) 静かな秋の庭は素漠としていてと誰が言うのである

ろうか。黄葉が盛んに散っているではないか。この動きこそは、「真人」しか感得できない「仏心」(「自然」)のなせる業(動き)――現成公案――なのだ。

『明暗』百四十章と漢詩の関係を考えていこう。

すでに見たように、『明暗』百四十章の「要点」は、吉川夫人が津田に清子への「未練」を煽り立て、「未練を晴らす」ために清子のいる温泉場に行く決意をさせることになった。留意すべきは、吉川夫人によって煽り立てられた津田の「未練」と漢詩の頸聯「室中毒を仰いで真人死し 門外仇を追いて賊子飢う」との繋がりである。「未練」とは仏教的視点からすれば、「俗世の煩惱」である。『明暗』百四十・百四十一章の津田の立場を、この漢詩の頸聯の表現と重ねるならば、津田の立場は次のように言うことが出来る。

――津田は、「清子への未練」という「毒」(「現実世界への執着心」煩惱)を吉川夫人に飲まされ、俗世において、「仇を追って」(「未練を晴らすために」)温泉場に行くことになったのである。――作者漱石は、明らかに、この漢詩の頸聯に『明暗』百四十章を重ねているのである。

『明暗』百四十章に重ね合わせて当該詩の頸聯を理解すれば、「真人」には、津田の内面に存在する、清子に会うことを拒否する「力」(「お延との関係を大切にしようとする津田の感情」)が重ねられており、「毒を仰いで真人死し」という表現には、津田が吉川夫人に与えられた「未練」という毒を飲んで、妻を大切にすべきだとする「人間的感情」を押し

殺した（「意識の表面から退けた」）ことと、さらには津田はその毒を仰ぐことによって、真実世界に生まれ変わっていくという意味とが二重に重ねられていると考えられる。そしてこのような理解の方向性からすれば、当該詩の頸聯全体には、次のような意味が重ねあわされていると理解することが出来るよう。

——「真人」が大死して「生き返」ったのは、「毒を以て毒を攻む」という方法によってであった。津田のうちに存在する人間的要素（「真人」）が生き返るには、「毒を以て毒を攻む」ことが必要なのだ。津田は「未練」に突き動かされて、清子に会いに温泉場に出かけることになった。津田が清子に会おうとする行為は、彼の意識を支配している「未練」（執着心）の表れだが、同時に、この行為は、彼がその執着心から抜け出す行為ともなるはずだ。（「津田のうちにある人間的要素が、彼の意識の支配権を握り、今まで彼の意識を支配していた世俗の執着心（我執）から脱することが出来るようになるのだ。」津田の「仇を追う」（「清子への未練を晴らす」）行為は、彼の我執を治癒し、人間として生き返るために必要なのだ。——

私見によれば、十月四日の漢詩には、午前中に執筆した『明暗』の作者漱石の、右に見たような津田への思いが投影されているのである。そしてこのような漱石の津田への思いは、彼が書いたであろう百八十九章以降の津田の形象とも繋がっていたと考えられるのである。

### III

#### 1

次に『明暗』における吉川夫人と津田の対話のうち、百三十八・百四十二・百四十三章とその各章を執筆した日の午後の漢詩を取り上げ、その関係の中に読み取れる、作者漱石の吉川夫人についてのコメントや批判をみていこう。

まず『明暗』百三十八章とその章を書いた日の午後の漢詩との関係からみていこう。

『明暗』百三十八章梗概——津田は、お延に津田と清子の関係に気づいてもらいたがっている夫人を発見した。夫人は次のように断定した。「わたしの鑑定から云ふと、今の延子さんは、都合よく私のお訛へ通りの所にゐらつしやるに違ないのよ」と。その後夫人は、「貴方は清子さんにまだ未練があまりでせう」と言いだし、「是でも未練があるやうに見えますか」「何うしてさう鑑定なさるんです」という津田に対し、「見えないからさう鑑定するのよ」、あなたの「未練」は「事実ですよ」と断定する。夫人は、その「未練」を「生かして使え」というのであった。——

右の章を書いた十月二日の午後、漱石は次の漢詩を創作している。

|         |          |       |
|---------|----------|-------|
| 不愛紅塵不愛林 | 紅塵を愛せず   | 林を愛せず |
| 蕭然浄室是知音 | 蕭然たる浄室   | 是れ知音  |
| 独摩拳石摸雲意 | 独り拳石を摩して | 雲意を摸し |

時対盆梅見鮮心

時に盆梅に對して 鮮心を見る

麈尾麈毫朱几側

麈尾の麈毫は 朱几の側

蠅頭細字紫研陰

蠅頭の細字は 紫研の陰

閑中有事喫茶後

閑中事有り 喫茶の後

復賃晴暄照苦吟

復た晴暄を賃いて 苦吟を照らさしむ

大意――

(首聯) わたしは、俗世間も愛さないし、禅道場での修行をも愛さない。わたしが愛しているのは、書齋(淨室)の何もないからりとした世界なのだ。この書齋の雰囲気こそがわたしの知音なのだ。

(頷聯) (わたしは書齋で一人) 拳石を摩して、石の心になろうとし、盆梅をみては、その苔の心を知ろうとするのである。(「石や苔こそは、現世の人間の行動を黙照している真実世界の存在なのだ。」)

(頸聯) 今は、(原稿を書くときに心の友とした) 麈尾の麈毫(払子の長い毛)は、朱塗りの机の傍らに横たわっており、蠅頭細字で心血を注ぎ込んだ原稿は、硯の陰にあるだけだ。(今日の仕事は終わったのだ。)

(尾聯) (その仕事が終わった) 心安らかな時間にもすることがある。それは、わたしがこの日常世界で、茶を飲むという行為であり(この日常底の行為こそは真実世界のありようなのだ)、そしてその苦吟して詩を創作し、その詩を、晴れた日差し(仏心の顕現)に、鑑定してもらうことなのである。(「私は、詩作によって真実世界に生きていることを実

感できるのだ。」「私は、詩作によって真実世界の境地を自分の創作視点にし続けることができるのだ。」)

『明暗』百三十八章と漢詩の関係を考えていこう。

吉川夫人は、津田夫婦に対する権力者の立場を利用して、彼らの内面に踏み込み、彼らを自分の好みの夫婦に作り変えようとする暴君である。『明暗』百三十八章に描かれている夫人はお延や津田の心理状態を的確に「鑑定」してみせる。そして自分の計画に従って、彼らをそれぞれ別個に、自分の意図するところへと導こうとしている。漱石は、この章でも、吉川夫人の自信にあふれた「鑑定」を、批判的言辞を加えることなく客体化してその醜悪さを浮き彫りにしているのみである。

漱石は、この章を書いた日の漢詩において、現実世界を黙照している拳石や盆梅の苔の視線(「禅的な「自然」の立場」)に成りきろうとする作者としての意識を詠っている。ここには、石・苔・晴暄の視線(「禅的世界における仏心の視線」)に同化することによって、吉川夫人の「鑑定」の醜悪さへの批判を抑制し、批判的言辞を加えることなくその内実を客体化して描き出そうとしている漱石の作家意識の表明を見ることが出来る。

漢詩の中に投影しているこのような漱石の作家意識は、その尾聯「復た晴暄を賃いて苦吟を照らさしむ」に最もはつきりと現われていると考えられる。『明暗』百三十八章の特徴は、吉川夫人のお延や津田への「鑑定」のありように焦点が

あるが、この吉川夫人の「鑑定」という行為と、漢詩の「苦吟」に対する「晴暄」の行為（鑑定）とは著しい類似がある。この類似には、百三十八章の吉川夫人の、暴君の立場からの「鑑定」に対する漱石の次のような批判意識が込められているといえよう。

——吉川夫人の「鑑定」は、「我執」からの鑑定に過ぎない。わたしは、自分の心（苦吟で詠った世界）が「仏心」（「大自然の意思」と一致していることを、「我執」とは無縁の大自然の顕現である「晴暄」（日差し）に、「鑑定」してもらうのだ。——

この詩にも、『明暗』百三十八章で描き出した吉川夫人の醜悪さへの作者漱石の批判が表明されているのである。

## 2

吉川夫人と津田との対話の最後の場面（百四十二章）と漢詩の関係に移ろう。

百四十二章の梗概——津田と吉川夫人の話題は、お延の再教育の方法に移った。夫人は、貴方は知らん顔していればよい、後は私がやるからというだけで詳細は明かさなかった。津田は夫人に何をされるかわからないという懸念があった。夫人は自分に都合のよいお延を鍛え上げることが津田のためになると誤解しているらしかった。その胸中の真底を探るととんでもない結論になるかもしれない（と、語り手は津田の心中を描き出す）。夫人はお延を次のように批評する。

——少しうぬばれすぎているところがある。内側と外側がま

だ一致しない。あれでなかなか慢気が多い。そんなものはみんな取っちなまわなくちゃ。——そんな批評をしているとき、夫人にお秀から、お延が病院に回るかもしれないという電話がかかってきた。夫人は、病室を後にした。——

漱石は、右の百四十二章を執筆した十月六日の午後、次の詩を創作している。

|         |                  |
|---------|------------------|
| 非耶非仏又非儒 | 耶に非ず 仏に非ず 又儒に非ず  |
| 窮巷売文聊自娛 | 窮巷に文を売りて 聊か自ら娛しむ |
| 採擷何香過芸苑 | 何の香を採擷して 芸苑を過ぎ   |
| 徘徊幾碧在詩蕪 | 幾碧を徘徊して 詩蕪に在り    |
| 焚書灰裏書知活 | 焚書灰裏 書は活くるを知り    |
| 無法界中法解蘇 | 無法界中 法は蘇るを解す     |
| 打殺神人亡影処 | 神人を打殺して 影亡き処     |
| 虚空歴歴現賢愚 | 虚空 歴歴として 賢愚を現す   |

大意——

（首聯） 私はキリスト教徒でもないし、仏教徒でもない。また儒教の徒でもない。陋巷で売文生活をしてただ楽しんでる作家に過ぎない。

（頷聯） わたしは芸術の苑で、どんな「大切なもの」（「香」）を摘み取ったであろうか（何も摘み取らなかった）。わたしは大切なもの（「真実世界」）を求めて心の旅をしてきたが、いまや、（禪）詩のなかに真実世界を見出して、その世界に生きているのだ。

（頸聯） （到達した真実世界について言うならば）、（禪）

詩や書物に書かれた仏法は、書物の中にあるのではなく、書物を離れた現実世界の中にこそ存在しているのだ。だから仏法書を焼却することで、本当の仏法は感得出来るし、仏法は、無法界（＝虚空）の中でこそ、本来の姿を顕現させているのだ。

（尾聯） 虚空（＝眞実世界）は、あらゆる権威や存在をも否定し乗り越えた無の世界（＝影亡き処）であり、その虚空（＝仏法の世界）は、（俗人の計り知れないところから）人間世界の賢愚（や善悪）を照らし出しているのだ。

『明暗』百四十二章と漢詩の関係を考えていこう。

この章で吉川夫人はお延を自分の好みにあつた人間として再教育する意志をはっきりと示す。作者漱石は、お延への影響を気にせざるを得ない津田の意識に映る夫人の横暴さを浮き彫りにしている。一方、漱石は詩の前半で、自分の立場が、耶・仏・儒でないことを述べ、自分は作家なのだと主張している。この感慨は作者漱石が百四十二章で、津田の立場に寄り添いながら、吉川夫人の醜惡な内面を徹底的に分析して示していることと関係すると思われる。漱石は、吉川夫人の醜惡さを拒否するのではなく、その描写に全力を注ぎ込む自分たを、宗教家ではない、作家なのだと自覚せざるを得なかったのである。前半にはこのような漱石の思いが投影していると考えられる。

問題は、この詩の後半部分で漱石が仏法のありようを詠っていることの意味である。かつて漱石は、堀家でお延がお秀

と対決する場面のクライマックス百二十九章を書いた九月二十三日に創作した詩でも、仏法の力を詠っていた。そこでは、仏法は彼らの我執を切り殺し、彼らを再生させずにはおかない力として詠われていた。その仏法のありようには、お延とお秀の醜惡な会話をこれ以上客体化して描き出すことに耐えられない、作者漱石の批判的意識が込められていた。同様に、当該詩で詠っている仏法のありようにも、百四十二章で批判的言辞を加えることなく吉川夫人の横暴さを描き出した時の作者漱石の気持ち（吉川夫人の意識のありようへの次のような批判）が重ねられているといえよう。――仏法は決して夫人を許しはしないのだ。仏法は吉川夫人の行動を照らし出しており、人知では計り知れない力で、彼女を裁こうとしているのだ。吉川夫人や津田の内面を導いている本当の力（法）は、人知では測れないのだ。だから、今のわたしは小さい心で吉川夫人を批判してはいけないのだ。――

漱石は『明暗』では抑制していた吉川夫人の横暴への批判を、漢詩の中で表明しているのである。

### 3

吉川夫人と津田の対話が終った後の章（百四十三章）とその午後に創作している漢詩との関係を考えていこう。

百四十三章梗概――お延は病院に向かっていた。往來の曲がり角に来たとき、筋向いに電車が止まった。お延は、そのガラス窓を通して見えた女性が吉川夫人ではないかと直感した。お延の足は重くなった。自分に仕組まれた謀計が内密に

どこかで進行している……お秀や吉川夫人が関係していると推測できた。お延は夫津田以外に頼れる人はいなかった。しかし車中の女が吉川夫人であったとすれば、もし夫人が病院に行っていたとすれば……津田もまた……三人は「一種の電氣を通はせ合つてゐるかも知れない」。お延は考えざるを得なかった。へどんな態度で、どんな風に津田に会うのがこの場合最も有効だろうか。夫婦の癖にそんなことを考えて何になるという非難を内面に聞かなかったお延は、いったん家に帰って、それから出直すのが上策だと思い極めて、取って返した。――

右の百四十三章を執筆した十月七日の午後、漱石は次の漢詩を創作している。

|         |          |             |
|---------|----------|-------------|
| 宵長日短惜年華 | 宵長く日短くして | 年華を惜しむ      |
| 白首回来笑語諱 | 白首回し来たれば | 笑語諱し        |
| 潮満大江秋已到 | 潮は大江に満ちて | 秋已到り        |
| 雲随片帆望將賒 | 雲は片帆に随いて | 望み將に賒かならんとす |
| 高翼会風霜雁苦 | 高翼 風に会いて | 霜雁苦しむ       |
| 小心吠月老嫠誇 | 小心 月に吠えて | 老嫠誇る        |
| 楚人売劍呉人玉 | 楚人は劍を売り  | 呉人は玉        |
| 市上相逢顧眄斜 | 市上に相逢うて  | 顧眄斜めなり      |

(大意)――  
(首聯) (季節が秋から冬へと移り)、夜が長く日が短くなると、自分の人生の時間もまた終わりに近づき、過ぎ行く

時間が惜しまれる。白髪頭で周囲を見渡すと、世俗の人々は、にぎやかに談笑しているばかりである。(彼らは、人生の時間やそれを掌る「大自然」の存在を考えないようである。しかし人間は、季節の変化や時間を掌る「大自然」の意思のうちにしか生きることが出来ないのだ)

(頷聯) 眼を転ずると、潮はすでに大江に満ちている。秋がすでに来ているのだ。その大江には片帆が浮かび、雲はその片帆に随って動いているようである。その風景ははるか遠くまで広がり、果てしがない。(この「大自然」の風景に、「我執」はあるうか。存在するのは、大きな自然の運行の意思だけだ。この風景の果てしなさこそは、大自然の作り出す現成公案の姿なのだ。)

(頸聯) しかし、この「大自然」が運行する「自然」の内部分では、霜雁は高く飛ばんとして強風に苦しみ、老犬は、月(「大自然の顕現」の意思を知らず、その月(「大自然」に吠えるという小心を誇るのである。)

(尾聯) 世俗に生きる人々は人を傷つける劍を売ったり、大切な玉を売って生を営んでいる。<sup>10)</sup>かれらは、出会えば、互いに批判の眼差しを向ける。「大自然」は、このような世俗の人の生の営みを、静かに照らし出しているのだ。しかし彼らは、このことに気づいていないのだ。――わたしは、このような俗世に生きる人々を、「大自然」と同じ立場からじっと見つめているのである。

『明暗』百四十三章と漢詩の関係の検討に移ろう。

百四十三章のお延は、病院に行く途中で電車に乗っていた夫人を見かけ、吉川夫人を中心とする自分に対する包囲網を直感して苦しむ。このお延の苦しみを漱石は、漢詩の頸聯の前半「高翼 風に会って 霜雁苦しみ」に同情を持って投影させていると考えられる。また頸聯の後半「小心 月に吠えて 老嫠誇る」には、お延を教育してやると津田に「臆面もなく」語る吉川夫人が批判的に寓意されているといえよう。そして尾聯の前半「楚人は剣を売り 呉人は玉」の「楚人」には、お延の心を制圧しようとする吉川夫人が、また「呉人」には、自尊心を夫人に売り渡さねばならないお延が寓意されていると考えられる。また尾聯の後半「市上に相逢うて顧眄斜めなり」は、お延と吉川夫人が世俗においては互いの腹の中を探り合わねばならないことの寓意と思われる。また、この句は百四十三章のお延が電車に乗っていた吉川夫人を見かけ、自分への包囲網を直観する場面とも繋がっている。そしてこの詩全体に流れている基調——大自然が掌る季節や時間は人間の意志とは無関係に運行されており、人の営みもまた大自然が作り出す一景に過ぎないという認識——と、頸聯や尾聯の關係には次のような漱石の吉川夫人へのコメントや批判の意識をみることが出来るよう。

——『明暗』の醜惡な吉川夫人の言動は、宇宙の運行を掌る存在としての「大自然」の「大きな心」を知らずに、自分が絶対者であるかのように錯覚している、すなわち津田やお延の支配者なのだと誇る「小心」者の驕りなのだ。——

この詩には、『明暗』の中では描きこむことの出来なかった作者漱石の吉川夫人への批判とお延への同情（暖かい眼差し）が吐露されているのである。

#### おわりに

本稿では、『明暗』における津田と吉川夫人との対話場面とそれらを執筆した日の午後に創作した漢詩との關係のなかに、『明暗』の作者漱石の創作意識の現われを見てきた。漱石は『明暗』執筆においては、吉川夫人や津田の醜惡さについて批判的言辞を加えることなく、彼らの言動をありのままに浮き彫りにしていた。しかしそれらの章を執筆した日の午後の漢詩との關係においては、作者漱石の『明暗』創作の現場——津田や吉川夫人と向かい合い、彼らと激しく論争している作者漱石の意識——をみることが出来るのである。そして同時に、その『明暗』と漢詩とのつながりの中に、『明暗』執筆時の作者漱石の次のような創作意識——禅的思惟の枠組を梃として、津田やお延の意識の深層に深く降り立ち、彼らの意識の表層（現実生きるための世俗意識）と深層（その根底にある人間としての根源的意識）とのかかわりに焦点を当て、その二つの意識の動きを描き出そうとしている漱石の創作意識——の現場をもかいま見ることが出来るのである。

#### 注

(1) 本稿で扱った漢詩の語釈や通釈は多くの注釈書を参照させて

いただいた。特に、一海知義氏（平成版）岩波『漱石全集十八巻』、飯田利行氏『漱石詩譯』から多くの教示を得ている。しかし詩の理解については私見と先学の諸注釈書とは異なるところも多い。その注記は煩雑となるので省略した。

- (2) 拙稿『明暗』における「自然物」と「西洋洗濯屋の風景」  
〔大阪経大論集〕二〇〇一年十一月。

- (3) 「風は鞆靴を吹きて 虜塵尽き 雨は滄溟を洗いて 天日高し」——「鞆靴」（中国の東北地域）は戦塵が絶えない場所の意であるが、ここでは、俗世の象徴。（句意は、「大意」でしめた）。この句の「鞆靴」「虜塵」には、『明暗』の世界——具体的には、漱石が今執筆している吉川夫人と津田の対話の醜惡な世界——が象徴されているといえよう。この句は、『明暗』の描き出す現実世界に生きる打算や保身に彩られた人間の意識を洗い流したその奥に、あるべき人間の意識世界（真実世界）があると詠っていると考えられる。

- (4) 「蕭風」——「蕭」については、『槐安国語』卷三に「挺拔威音那畔、蕭然空劫已前」（威音那畔に挺拔し、空劫已前に蕭然たり）とみえる。道前宗閑氏（『訓注槐安国語』）の注に、  
「蕭然」は「突出して空寂なるさま」。「威音那畔」も「空劫已前」も「過去久遠劫以前」の意、また転じて「向上の自分」を指す。とある。氏の注に従って、『蕭風』は真実世界の「空寂の風」をさすと理解すべきであろう。

- (5) 拙稿『明暗』における清子の形象〔大阪経大論集〕二〇〇二年三月

- (6) 以下、十月四日の詩の語釈を記す。

○「北斗長眉に落つ」——この句に関係する禪語に「北斗に身を蔵す」や、その概念（禪的な絶対の世界では、時間・空間・質量を超越する）を表す法句に「展れば則ち法界に彌綸し、収むれば則ち糸髪も立せず」（『臨濟録』）などがある。また

「長眉に落つ」に近い表現に、『槐安国語』卷四「会得せば、尽十方界乾坤大地、諸人の眼睫上に在って大光明を放つ」がある。これらの禪語を踏まえるならば、この句の意味内容は、天の中心にある北斗星とわたしとが融合したこと（悟りを得たこと）、私の意識は絶対の世界にあるので、わたしは天の中心にある北斗の立場（＝禪的眞実世界・仏心）から、あらゆる現象を見ることが出来るようになっていくのだ、ということであろう。

○「室中 毒を仰いで真人死し」——「毒」とは「三毒」（＝貪・瞋・痴＝煩惱）。「真人」は、自分の「本来の面目」（悟り）、あるいは「本来の面目」に生きる人の意。句意は、浄室での坐禅は「毒」（煩惱）を払うことにあるが、「真人」（悟り）の境地はその毒（＝煩惱）を飲み込んで（すなわち、「毒」を持って毒を攻む）（『普灯録』）ことによって、その毒（煩惱）から脱し、（＝大死して眞実世界に生き返って）本当の自由（禪的な絶対の世界）に生き返るのだ、ということであろう。

○「門外 仇を追いて賊子飢う」——「門外」とは、俗世界。「仇」は、世俗の利害関係から生ずる執着心。「賊」は禪語ではさまざまな意味で使われるが、ここでは「六賊」すなわち、煩惱の意。当該詩に類似した「賊」の用法では、『江湖風月集』卷上、金華復嚴己和尚の禪詩（「夢宅」）に「睡中、道うこと莫かれ、惺惺たらずと、四大、由来も亦た強いて名づく。正に是れ、賊、空屋の裡に帰す、未だ一步を行ぜざるに、已に天明。」がある。後半の意味を芳澤勝弘訳で示せば次のごとくである。「この夢幻の空宅（肉体）に眼・耳・鼻・舌・身・意の六賊が潜んでいる。しかし、この空宅には盗むべき何物もないとわかるならば、一步を行ぜずして、即今当処に、賊心のなくなる夜明が訪れ、夢から覚める」（『江湖

風月集訳注』。以上の語釈などを踏まえれば、当該詩の句意は先に示した「大意」のようになろう。

(7) (以下、十月六日の詩の注釈を記す。)

○「独り拳石を摩して雲意を摸し」——この句における「拳石を摩して」から連想されるのは、大正五年八月二十一日の「尋仙……」の「石印を撫摩して自由に成る」である。ここでいう石は、俗世を超越した真実世界の象徴であり、「拳石」も同様の意味で用いられている。「雲意」は、陶淵明「帰去来兮の辞」の「雲無心以出岫 鳥倦飛而知還」を踏まえており「無心」(＝世俗を離れたありのままの心)を指すが、この句では、漱石は、この「無心」を禅的な意味に引き付け、禅的な俗世を超越した禅的世界の自然物の心(＝「無心」＝仏心)になりきろうとする気持ちを詠っている。

○「時に盆梅に対して薜心を見る」——「薜心」の用例はまだ見つけ得ないが、苔は(禪)詩では石と同様、俗世を超越した真実世界の象徴として詠われる代表的な景物であり、「薜心を見る」とは、苔に宿る仏心(＝俗世間を黙って見つめている仏心)を探ろうとする(＝仏心になりきろうとする)という意味であろう。

○「盆栽」とは、「自然」のミニチュアであり、ここでは、俗世を超越した存在としての「自然」の象徴としての意味を持つていると考えられる。(この詩で詠う盆梅と百三十一章に描かれた「楓の盆栽」とは、さまざまな共通点がある。紅梅ならば、楓の紅葉と赤という色でも共通する)

○「復た晴暄を賃いて苦吟を照らさしむ」——「晴暄」もまた、禪詩における景物の代表であり、仏心の顕現という意味を持つ。私見によれば、この句は、自分の心を表現した漢詩の世界が、仏心(の顕現である陽光)と一体化していることを、陽光(仏心)に確かめてもらう、という意味を現している

考えられる。

(8) (以下、十月六日の詩の語釈を記す。)

○「幾碧」——諸説あるが不詳。「碧天無際」「碧層層」という語の「碧」には、仏心(真実世界)の根源的場所としての象徴的要素があり、当該詩の「碧」を、天や真実世界と解するならば、「幾碧を徘徊す」は「真実世界にいたるさまざまな経験をした」という意味を表し、前詩の「百年功過有吾知」「百殺百愁了期」と同様の意味であると考えられる。(したがって、第四句は次のような意味を含蓄すると考えられる。——わたしは真実世界を求めて、天と合しようとして努力し、たどり着いたのは、詩の世界であり、今は(詩のなかに真実世界があると知って)詩の世界に身をおいているのだ。——

○領聯と頸聯との関係がわかりにくい。初案との関係から推測すると、その間に次のような法句が意識されているのではないか。「平蕪尽きる処是れ青山」(『槐安国語』巻四)\*「青山」とは、「本分の家山」のこと(道前氏注)。領聯とは「平蕪」と関係し、頸聯とは(その青山では)といった意識でつながっているとおもわれる。

○「焚書灰裏」——『無門関』二十八則などに見える徳山の次の故事に基づく。——悟りを得た徳山は、仏教の教義を極めて、一本の毛髪を大空に投げたようなものに過ぎないと、法堂の前で金剛經の注釈書を焼き捨てた。——

○「無法界」——「三界無法」。この世界には一物として実在するものはないこと。仏法の根源。

○「打殺」——『臨濟録』(示衆)「仏に逢うては仏を殺し、祖に逢うては祖を殺し、羅漢に逢うては羅漢を殺し、父母に逢うては父母を殺し、親眷に逢うては親眷を殺して、始めて解脱し、物と拘わらず、秀脱自在することを得ん」などを念頭においての語。無に徹するに、自分にもっとも大切なものを

も否定し乗り越えること。〈『禪の語録』十〉  
 (以下、十月七日の詩の語釈を記す。)

○「潮は大江に満ちて 秋已に到り 雲は片帆に随いて 望み  
 將に餘かならんとす」——秋の現成公案を示す。この詩想は、  
 九月二十六日、九月二十七日の頷聯と類似する。杜牧「九日  
 齊山登高」の初句「江は秋影を涵して雁初めて飛び」などを  
 典拠にしているとおもわれる。また、『貞和集』には、類似  
 する用例が多い。

○「高翼風に会って霜雁苦しみ」——『貞和集』(巻九)に、  
 以下のような類似の詩がみえる。北山紹隆「書鴈」「縹緲と  
 して空を凌ぎて兩翼齊し、白河洲渚晚淒に迷ふ、蘆花吹き盡  
 して霜風急なり、寒塘に下りて伴を擇びて棲んと欲す」(巻  
 九)

○「小心 月に吠えて 老嫗誇る」——多くの注釈は、典拠  
 として「蜀犬日に吠え呉牛月に喘ぐ」(蜀の地は霧が多く日  
 を見ることが少ないゆえ、日の出る度に犬が怪しみ疑って吠  
 える。呉の地の牛は熱を恐れるのあまり月を見ても日かと疑  
 い喘ぐ。)を引き、日を月に換えたものとする。また、飯田  
 利行氏は『便蒙類編』上「夜犬月に吠え、秋雁空に排ぶ」  
 も引く。しかし、漱石の力点は、「(霜雁)苦しみ」「(老嫗)  
 誇る」という点にあり、指摘されている典拠からは遠い。  
 「風」と「月」は前句から導き出された、「大自然」の象徴  
 であらう。

○「楚人は劍を売り呉人は玉」——典拠不明。『槐安国語』卷  
 二に「拙子を撃つて云く、「国清うして才子貴く、家富んで  
 小兒嬌る」に着けた白隠の下語に「呉王劍客を好んで百姓瘡  
 癥多く、楚王細腰を好んで宮中餓死多し」とある。この下  
 語から「そこで商売として、楚人は呉に劍を売り、呉人は楚  
 に玉を売った。」(『俗界に生きる人間醜態』)という句を創

った可能性もある。しかしこの場合には、玉は、服飾品の  
 「玉」という意味になるが、当該詩の「玉」は、人にとって  
 大切なもの(『人間の心』)という意味で用いている。(漱  
 石詩で玉を人にとって大切なものへ『心』とする用例は、大  
 正五年十月二十一日の絶句「元と是れ錦衣の子 衣を売り又  
 た珠を売る」などがある。同じ意識であらう。)

(10) 本稿では、「劍」をお延を再教育しようとする吉川夫人の驕  
 慢の投影として理解した。しかし「劍」を「玉」と同様「仏心」  
 としても理解できる。たとえば、大正五年十月二十一日の詩で  
 は、人が捨ててしまった仏心を、「地に擲ては鏗鏘たり金錯の  
 劍 空に砕けて燦爛たり夜光の珠」と詠っている。その場合に  
 は、「楚人は劍を売り呉人は玉」は、「世俗の人は、人としての  
 大切な魂を失っている」という意味にならう。